

## 1 静岡から、福井への伝言

W.E.グリフィスが福井に赴任して五ヶ月が経とうとする1871年7月下旬、旧将軍家が知事を務める静岡藩から彼への伝言が福井に届きました。福井におけるグリフィスのように、静岡の学校でも信頼できる米国人教師を雇用したいので、ふさわしい人物をグリフィス先生に紹介してほしいという依頼でした。福井藩への伝言を送った人物の名は勝安房（かつあわ）。

今日海舟の号で知られるその人の意にかなう人選として、グリフィスは大学の同級生で親友のエドワード・ウォレン・クラークにすぐ教職斡旋の手紙を送り、クラークは年内に来日して勝を喜ばせました。住居となる洋風の家を建てたり、未だご法度だったキリスト教についても話す許可を政府からとりつけたりする勝の心遣いに、クラークは感動し、献身的に授業に励みました。この後生涯続くことになる勝とクラーク二人の縁を結んだのがグリフィスだったわけですが、どうして勝はグリフィスのことを知っていて、日本人青年を教育する人物として彼を信頼し、藩の大事を任せただけなのでしょう。

日下部太郎が渡米した1867年、勝の長男小鹿（ころく）も父の出資で米国に留学し、十年後に米国の海軍兵学校を卒業しました。小鹿の付き添いとして勝は二人の門弟、富田鉄之助（仙台藩）と高木三郎（庄内藩）の留学も世話しました。三名が当初滞在して学んだのは、既に横井小楠の甥二人（左平太と大平）および日下部が学んでいたニューブランズウィックであり、彼らの教師を務めていたW.E.グリフィスと勝小鹿との出会いがその地にありました。横井兄弟も勝が小楠から預かって神戸の操練所で学ばせた青年たちでした。日本人として最初に左平太が米海軍兵学校に入学しましたが、大平と日下部は結核に罹り、日下部が現地で亡くなった半年後にグリフィスは日本へ向かいました。

グリフィスによりラトガース大学に残されたコレクションの中に、日下部太郎の葬儀に参列した邦人留学生たちの集合写真があります。後列一番右に高木三郎、その左に勝小鹿が写っています。他に見えるのはアメリカに着いて間もない日向佐土原藩（薩摩島津家の一族）の世子（又之進）とその弟（丸岡武郎）、および付き添いの藩士二名（平山太郎、橋口宗儀）、熊本藩士二名（林玄助と津田亀太郎）、そして撮影の二年前に密航先のイギリスから渡米して日下部たちに合流していた薩摩藩士杉浦弘蔵です。薩摩における開化の実践を若き日の勝安房に見せ、政治の要諦を説いた先駆者島津斉彬や、その識見の高さに勝が終生敬

服した横井小楠の存在感がうかがえる顔ぶれです。杉浦は滞米中に洗礼を受け、後にクラークやグリフィスが教師として在籍した頃の開成学校の校長を畠山義成の本名で務め、彼らが生徒に聖書の内容を教えることを黙認しました。

勝安房はアメリカからの便りで「悴の先生」の来日を知りました。グリフィスの福井着任間もなく、横井大平も熊本で逝去し、小鹿が仲間たちの志を継ぎました。富田はニューアークの商業学校に通い、現地で日本政府初代のニューヨーク駐在外交代表に抜擢され、高木はワシントンの外交部代表を代行した後、サンフランシスコ駐在領事を務めました。高木の故郷である山形県鶴岡市も、福井市と同じくニューブランズウィックの姉妹都市となっています。

## 2 長崎、海の学校の師と弟子

アメリカで海軍士官教育を受けた小鹿。その父勝安房自身が、かつて日本で最初のお雇い外国人の生徒となって、長崎で軍艦の操練を学んだひとりでした。若い頃からオランダ語を学んでいた彼は生徒と教官をつなぐ役割を果たし、他の生徒より長く在留し、ペルス・ライケンや、その後任のカッテンディーケたちオランダ人教官と深い信頼関係を結びました。長崎の学校を離れた翌年、幕府が初めて外国に派遣する使節団の中に、咸臨丸の艦長として同期生たちと共に勇んで太平洋を渡る、勝の雄姿がありました。

その旅で訪れたサンフランシスコ、帰途寄港したハワイが勝安房の人生における最初で最後の外国滞在となりましたが、活気あふれる米国社会を実見したことは、後に跡継ぎ息子を私費でアメリカへ送り出す強い意志をもつには十分な経験でした。小鹿が渡米する五年前、操練所で勝安房と共に学んだ後輩の榎本武揚たちが、オランダでさらなる修養を積むため海を渡っていました。

学生時代、勝安房は教官の忠告を聞かずにのぞんだ実験航海で嵐に遭い、死を覚悟したことがありました。未経験な若いサムライの軽率を戒めるとともに、「いい経験をした」と温かく彼らを導いた教官たちに対し、また世界を知らない日本人のために開国を勧告し、幕府初の蒸気船観光丸となる軍艦スンビン号を贈って、若き侍たちの航海教習を世話した領事ドンケルクルティウスをはじめとするオランダ人たちの厚情に対し、勝はその恩を生涯忘れませんでした。

富田鉄之助が学んだニューアークの商業学校の校長 W.C.ホイットニーは、英語の拙い富田を自宅に住ませ、妻アンナが富田に英語を教えました。富田が教材として聖書を用いてほしいと望んだことが、アンナの宗教心を高めました。

1875年、外交官となっていた富田の上司、森有礼が東京に商業学校を設立す

る話が進み、富田の恩師が招聘され、ホイトニー家は母国の生活基盤を清算して一家をあげて来日します。ところが森とホイトニーの関係がうまくいかず、教師としての採用が微妙になり、ホイトニー家は経済的にも追い詰められます。事情を富田の姻戚から知らされた勝が、学校とホイトニー家に対し千円の寄付を申し出、一家は救済されました。ホイトニー家の長女クララは、小鹿の妹の逸子と親友になり、両家は家族ぐるみで仲良く交流します。ホイトニー家が住む家を勝が赤坂氷川町の自宅に隣接させて建てた後は、家族同然となりました。クララは逸子の弟梅太郎の子を宿して結婚します。二人は梅太郎の母方の姓 Kaji(梶)を名乗り、六人の子をもうけました。

### 3 東京赤坂氷川町、勝安房の十字架

勝はクララと孫たちの将来を考え、自分という保護者がいなくなったら夫梅太郎の元を離れて帰国し、アメリカで子供たちを教育するよう勧めたようです。後年においても、クララは夫の父と、その夫人を深く尊敬していました。

勝の家は妻妾同居でした。来日したキリスト教徒が最も嫌忌した日本社会の在り様でした。クララは、梅太郎も勝が夫人以外の人に長崎で生ませた子であることを知っていて結婚しました。彼女は母の影響を強く受けた厳格なキリスト教徒だったにもかかわらず、終生勝安房を敬い続け、彼を支えた夫人、すなわち義理の母を、心から慕い続けました。その溢れんばかりの思いは、日露戦争のさなかにクラークが執筆した著書 *Katz Awa* に引用された、クラーク宛ての手紙に切々とつづられています。

クラークが、その勝の小伝を書くための史料としたのは、彼が日本を離れて十九年後(1894年)に再訪した東京で、勝に頼んで書いてもらった、維新に到る簡潔な歴史、及び当時の回想でした。頼朝以来国政を執った武家政権の最後、徳川家が政権を私物とみなさず天皇に返した事で日本が乱世に陥らず、江戸百万の命も救われた革命の真実。同じく国民統合を目的としながら戦争を手段としたドイツのビスマルク、および悲惨な内戦を避け得なかった祖国のリンカーンと比べながら「ピースメイカー」としての勝を讃えるクラーク。牧師である彼が「これまでに会った異教徒とキリスト教徒の偉大な人々の中で誰よりも」勝を尊敬し愛すると読者に告げます。維新において徳川が示した自己犠牲の精神を誰より体現したのが、戦うことなく敵に主家を売り渡した犬侍という汚名を、国と民を思う決断のゆえに負いながら、なおも主家とその旧臣たちのために心を砕いて生き続けた、明治の勝安房でした。

勝がクラークと再会する二年前、小鹿が父母に先立ち亡くなりました。維新の

勲功により伯爵家となっていた勝家を「煙のように消してしまいたい」との思いもあった勝でしたが、旧主徳川慶喜の息子精（くわし）を婿養子として、家を継がせたのでした。勝は晩年まで、慶喜の名誉回復に努めました。

勝安房もグリフィスも、日記を欠かさなかった人でした。二人の記述からは、グリフィスが東京在住時に二度、氷川町を訪れていたことがわかります。帰国する三日前には、勝に歴史の話をしてもらったようです。その会見は二年後（1876年）にグリフィスが維新を日本通史のかたちでまとめ世に出した著作 *The Mikado's Empire* の執筆に活かされました。

それからおよそ二十年、勝はクラークの求めに応じ、往時を回顧し、一編の歴史を書き上げました。それは富田の意志により、「幕府始末」の名で頒布され、今日に残されました。

知己を千載の下に待つ勝安房を同時代において認めた米国人牧師は、同胞から罪人としての悪罵を一身に浴びながら歴史上の磔刑に架かる道を、あえて選ぶ他なかった彼の人生に、自らは覚ることもなくキリスト教徒として生きた姿を見ていました。ホイットニー一家の人々も、「彼が神の王国から遠くにあったことなどない」と思っていました。大晦日の夜、供も連れずに出かけ、貧しい家々を訪ね歩いては、そっと餅代を渡していた義父の、遠い面影をクララは帰国後もずっと、覚えていました。

#### 参考文献

E. Warren Clark, *Katz Awa*

一又民子訳『クララの明治日記』（クララ・ホイットニーの少女時代の日記）

カッテンディーケ著、水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』（東洋文庫）

蔵原三雪 “The Griffis’ Journal of Tokyo Years”（1872～1874 のグリフィス日記）

高橋秀悦『海舟日記にみる幕末維新のアメリカ留学』

山下英一『グリフィスと福井』（福井時代の日記所収）、『グリフィス福井書簡』、

『明治日本体験記』（*The Mikado's Empire* 後編の訳述）

『勝海舟全集』より、「幕府始末」「海軍始末」「日記」「書簡・来簡」「断腸ノ記」

（勁草書房版。来簡は講談社版も）

## 人名

### William Elliot Griffis 1843-1928

米国の牧師。ラトガース・グラマースクール教師時代、横井左平太や勝小鹿を指導。1870年末に来日し、約一年間福井の藩校で、二年半東京の国立カレッジで教えた。東京時代、親友のクラークと同僚として共に暮らし、勝安房や大久保一翁（当時府知事）とも交流した。帰国に際して勝を訪ね、歴史の話聞き、同時代に至る日本史 *The Mikado's Empire* を書いて出版した（1876）。

### Edward Warren Clark 1849-1907

米国の牧師。ニューハンプシャー州ポーツマス生まれ。ラトガース大学でグリフィスと同窓。1871年末にグリフィスが紹介した静岡の学校教師の職に就くため来日し、二年間熱心に指導（当時を回想した著書 *Life and Adventure in Japan* を1878年に出版。飯田宏訳『日本滞在記』1967）。その後一年開成学校の教師を務めて帰国するまで、静岡と東京で勝安房と親しく交わり、深い敬意を抱く。晩年に再会し、彼の求めで勝が著した書「幕府始末」を参考にして、勝の没後、小伝 *Katz Awa* を出版した。日露戦争下の当時、日本が異教徒として米国で敵視されぬよう、キリスト的人物として勝の人生を描き、日本の戦争孤児のための寄金を募った。フロリダに所有した農園に Shidzuoka と名付けている。

### 勝安房 Katz Awa 1823-1899

幕臣。官途名安房守。通称、麟太郎（りんたろう）、また安房、維新後に安芳（あは＝“あわ”）。諱は芳邦（よしくに）、維新後に安芳（やすよし）。号は海舟。戊辰戦争で幕府を代表して新政府と折衝して以来、旧将軍家（静岡藩知事→徳川公爵家）が政府から疑念を持たれぬよう、後見に心を砕いた。多くの有能な藩士を中央政府に請われて斡旋し、自らも官職と栄爵を受ける事で徳川家を守り国に尽くした結果、死後まで誹謗され続けた。晩年、忌憚のない政府批判と人物評がマスコミに出て、今日の「勝海舟」人気の素となっている。

### 勝民子 Tami 1821-1905

勝安房の正妻。夫が何人も女中に生ませた子供も母として育てた。日本での生活の勝手が分からないホイットニ一家の世話を焼き、嫁となったクララから終生深く敬愛された。夫が不在の時に官軍に家を襲われた事など、波瀾万丈の人生をクララに語って聞かせた、「話好きのお母さん」。夫の死後、同じ墓に入ることを拒み、小鹿と共に眠ることを望んだ話が伝わる。（現在は勝夫妻のお墓は東京洗足に並んで立っている）。

Clara Kaji Whitney 1860-1936

梶梅太郎 Kaji Umetaro 1864-1925

クララが1875年に父母に連れられて来日してから、1880年に一家で日本を離れるまで日々つけていた日記は、亡くなってから四十年後に子孫により『クララの明治日記』として出版され、グリフィスが離日してまもない頃の東京の外国人社会の様相がわかる貴重な資料となっている。

1882年に再び一家で来日する途次、父ウィリアムをロンドンで亡くし、翌年東京（勝安房が用意した家）で母アンナ（青山墓苑に葬られた最初の外国人）を亡くした彼女を抱きしめて慰めた民子が、以後彼女の「日本の母」となった。

梅太郎は長崎に赴任した時代の勝安房と現地妻お玖磨の間の子で、母の死後勝家に引き取られて育つ（安房の三男。次男は夭折）。クララにとっては年下の頼りない男の子だったが、出生の秘密を打ち明けられ、後に深い仲となる。妊娠を機に1886年に結婚し、一男五女にめぐまれたが、夫婦の保護者だった安房が亡くなった翌年、生前の義父の勧めもあり、クララは梅太郎と別れて子供と共に帰国した。クララの子供たちは米国で母から祖父勝安房のことを「非常に理想的な人」として聞かされて育った。梅太郎は再婚して（夫人となった田崎このは榎本武揚の姪）二男一女を授かった。また、クララの兄ウィリスは金沢などでお雇い教師の職を務め、後に医者となって赤坂に病院を建てた。

目賀田逸子 Itz

目賀田種太郎 Megata Tanetaro 1853-1926

勝安房と女中の増田糸の間の娘逸子（勝の三女）が、同年代のクララ（当時15歳）と出会ってすぐに親友となったことが、勝・ホイットニー両家の深い交流を導いた。弟の梅太郎たちと共にクララに英語を学ぶ。後に夫となった種太郎は旧幕臣家の出身で、南校（開成学校の前身）で学ぶ優秀な学生だった1870年に留學生に選抜されて渡米し、1874年にハーヴァード・ロースクールを卒業。官僚として立身し、男爵となる。（日露戦争時に韓国の財政顧問。晩年に枢密顧問官）。専修学校の創立者。妻の逸子は大正時代の雑誌に“ハイカラな夫人”として紹介されている。息子の綱美は日本にタンゴを紹介したことで知られる。

勝小鹿 Katz Koroku 1852-1892

勝安房の長子。民子の実子。1867年に父の出資で渡米留学し、ニューブランズウィックの学校に通い、W.E.グリフィスの生徒となる。アナポリスの海軍士官学校で学び（1871～1877）、卒業して帰国後大尉に任官したが（後に少佐）、最初の妻を亡くし、自らも病で療養することが多く、早世した。再婚した妻との間に娘二人を授かり、長女の婿（徳川慶喜の子息、精）が勝家を継いだ。

大久保一翁 Okubo Ichio 1818-1888

幕臣。官途名越中守。諱は忠寛。幕末きつての気骨で知られた高級官僚にして、勝安房最大の理解者の一人。春嶽政権期に将軍家茂の側近として大政奉還を提議した先覚。幕府の崩壊に際し江戸城明け渡しまで一切を取り仕切り、旧幕臣の大量移住で困窮する静岡藩でも、教育・財政への逸材登用で諸藩をリードした。グリフィスの東京時代、またクララ来日の頃には、東京府知事職にあった。子爵。長男の三郎は植物学者となるが、若き日に米国留学から帰国して当主家達に近侍していた頃の彼に出会ったクララの淡い思いが、彼女の日記に見られる。

横井平四郎 Yokoi Heishiro 1809-1869

熊本藩士。号は小楠。松平春嶽に招かれ福井藩士を教導、幕閣に国家の指針を説き、その高い見識に勝安房も一翁も深く敬服した。帰郷後、熊本を訪ねた勝に二人の甥を託す。国家を憂える彼らは深い信頼で結ばれていた。勝から米国事情を聞き、G.ワシントンの高潔を尊敬する横井が留学させた甥たちの在米中、維新となり、中央政府の幹部として招かれ京都に赴任するが、攘夷派に暗殺された。

横井左平太 Yokoi Saheita 1845-1875

熊本藩士。父を早くに亡くし、弟の大平と共に叔父の小楠に育てられる。神戸の操練所や長崎の宣教師の元で学び、1866年に密航で渡米、叔父からの送金を頼りにニューブランズウィックで学ぶ中、祖国で維新となり、中央政府から国費留学生として認められる。海軍士官学校で学び帰国。弟は先に帰国して亡くなっていたが、再渡米してボストンで学んだ。元老院議員。

富田鉄之助 Tomita Tetznoske 1835-1916

仙台藩士。勝安房の塾生。小鹿と共に渡米留学するが、翌年戊辰戦争が勃発、居ても立っても居られず小鹿を横井左平太に託して高木三郎と帰国したが、師に諭されてすぐ再渡米し、勉学を続けた。ニューアークのビジネス学校で商務を学び、校長の妻アンナ・ホイットニーの教導で英語を磨いた。1872年にニューヨーク領事心得に任じられ官途に就いて以後、在外公館や大蔵省で活躍。二代目日銀総裁（初代副総裁。初代総裁は同時期に米国に留学していた薩摩藩士吉原重俊）、貴族院議員、東京府知事。杉田玄白の曾孫お縫と結婚し、杉田家と親しい福澤諭吉が仲人となった。クララの日記には、海外にいて不在の夫が日本に招いたホイットニー家を案じて彼らと同居した「富田夫人」が頻出する。勝安房が来日直後のホイットニー家の窮状を知ったのも、旧幕以来の知己杉田玄端（お縫の後見人）との関係からと思われる（高橋秀悦氏の著書による）。

高木三郎 Takagi Sabro 1841-1909

庄内藩士。勝安房の弟子で、小鹿、富田と共に渡米し、ニューブランズウィックで小鹿や日下部太郎と共に学ぶ。1871年、日本政府の駐米外交代表となった森有礼の下で会計事務を取り仕切った。不在の森に代わって日米郵便交換条約を締結した後、サンフランシスコ副領事に任じられ、翌1874年に一時帰国して結婚したが、授かった女子は成長せずに亡くなり、日下部太郎と同じ墓地に葬られている。1880年に退官後、生糸輸出商として活躍。

日下部太郎 Kusakabe Taro 1845-1870

福井藩士。長崎の宣教師の元で横井兄弟と共に学び、1867年に藩費で渡米留学。ニューブランズウィックで横井兄弟と同じ下宿に暮らし、大学で科学を学び、抜群の成績を修めた。やがて畠山義成たち薩摩藩士や勝小鹿の一行が合流し、“官軍”“朝敵”と分かれた祖国の政情をよそに、その未来のため共に励んだ留学生たちだったが、日下部と横井大平は志半ばで結核に命を奪われた。日下部の死に武士道の精華を見たW.E.グリフィスは晩年まで語り続けた。

畠山義成 Hatakeyama Yoshinari 1842-1876

薩摩藩士。1865年に藩がイギリスへ密航留学させた一人。森有礼たち同志五名と共にイギリスから渡米し、内二名とニューブランズウィックへ向かい、日下部太郎たちに合流してラトガース大学で学んだ。この時知り合ったグリフィスやクラークと、開成学校校長として再会し、彼らの布教活動を黙認した。

島津斉彬 Shimadz Nariakira 1809-1858

薩摩藩主。早くから海外の情勢を覚り、藩の近代化と国政の変革に努めた。演習航海で薩摩に寄港した若き勝安房に政治の要諦を諭し、以後も書信で交流した。側近く仕えた西郷隆盛は主君を通じて、自ら会う前から勝を信頼していたと勝自身は言う。松平春嶽も、自分は言うに及ばず、同時代の他者の追随を許さない名君だったと回顧している。

Jan Hendrik Donker Curtius 1813-1879

Gerhardus Fabius 1806-1888

勝安房は自著「海軍歴史」(1888)の中で、出島最後の商館長ドンケルクルティウスが幕府に孤立政策からの転換を諄々と説いた親切心を「邦人の最も感謝すべき処」とし、また、その斡旋でオランダが寄贈した蒸気船スンビン号の艦長として来日し最初の操船教習を担ったファビウスについて、「我が海軍の基礎をなせる・・・氏の誘導訓誨の厚き・・・嗚呼、その功忘るべけんや」と述べている。

Gerhard Christiaan Coenraad Pels Rijcken 1810-1889

「ファビュス氏の建白甚だ精悉にして、わが幕議を促すに足れるを以て、ついに海軍創立の議決定」（勝安房「海軍歴史」）となり、発足した長崎海軍伝習所の一期生となった勝たちを教えた最初のお雇い外国人がペルスライケン。二年の任期を終え、「朋友勝麟太郎君」に送った手紙の中で、日本人への期待と可能性を語り、優秀な蘭学者の勝が選ばれて海外に派遣されればと願っている。

Johan Cornelis ridder Huijssen van Kattendijke 1816-1866

ペルスライケンの後任として来日したカッテンディーケの日本滞在記は和訳されている（平凡社東洋文庫）が、そこには日本人の優秀さと軽率さに対する鋭い洞察が見られる。勝安房についても、オランダ語に通じ性格もよく、生徒との仲介者として信頼できるとしつつ、自分たちオランダ人の扱い方をよく心得ている人物と観察している。教官の忠告をきかずに行った無謀な演習から命からがら帰港した勝に、学問と実際の違いを命の危険によって自得しただろうと微笑をもって語ったカッテンディーケの教えは彼の心に刻まれ、「万般の事、活用の妙微に及んでは口頭にあらず」という勝の精神の基礎となった。海軍大臣在職中、かつての生徒榎本武揚たち留学生をオランダに迎えた。

榎本釜次郎 Enomoto Kamajiro 1836-1908

幕臣。諱は武揚。長崎の海軍操練所に、勝安房に一期遅れて入学。1862年、近代日本最初の留学生の一人に選ばれてオランダへ渡り、航海・化学・国際法など広く学び、現地で竣工した開陽丸を操船して帰国したが、まもなく大政奉還。戊辰戦争では勝安房の静止を振り切り、脱走して徹底抗戦した末に降伏した。後、北海道の開発や外交で活躍。工業化学会初代会長。海軍中将。子爵。

福澤諭吉 Fukuzawa Yukichi 1835-1901

幕臣。中津藩出身だが蘭学に熟達し、幕府の翻訳官に取り立てられた。咸臨丸での渡米後も、幕府の使節として二度海外渡航。著作が爆発的に読まれ新時代の寵児となるが、新政府の官職を断り、慶応義塾での教育に献身した。将来に期待した塾生小幡甚三郎の留学先からの訃報に接し、「心中の百事一時に瓦解」と嘆いた。（小幡のお墓は日下部と同じ墓地にある）。明治の顯官となり爵位を得た勝安房及び榎本武揚を批判する「瘦我慢之説」（1891年）を著し、公開前に二人に見せて意見を求めたが、二人とも全く意に介さなかった。

中村敬宇 Nakamura Keiu 1832-1891

幕臣。諱は正直。通称、敬輔、敬太郎。儒官として黎名を得るが、社会の用に立たない漢学者の現実を憂い、洋学に志し、勝安房に辞書を借りて英語を学ぶ。

幕府に請願して留学生（1866～1868）に選ばれ渡英。帰国の旅中、知人から贈られた *Self Help* (S. Smiles 著) を熟読して感動。静岡学問所教授時代に翻訳を公刊、大ベストセラーとなり、明治の青年にとって新時代を生きる指針となった（『西国立志編』1870）。藩内で外国人教師の招聘を説き、静岡にクラークが赴任すると親しく交友した。彼の論文「擬泰西人上書」はキリスト禁教撤廃への大きな力となり、後に自らも G.コ克蘭牧師から洗礼を受けた。J.S. Mill の *On Liberty* も訳し（『自由之理』1872）、その序文をクラークが書いている。新政府での官職を勝に斡旋されて拒否したが、直接断るよう言われて高官に面会した後、翻意して東京へ移る。退官後に東京に設立した私塾は当時有数の規模で、分校では女子教育も行った。コ克蘭やクラークに聖書の授業もさせた。東京で交友したグリフィスも、代表的啓蒙家として中村の名を挙げている。

巖本善治 Iwamoto Yoshiharu 1863-1942

女子教育者。出石藩儒者の家に生まれ、中村敬宇の同人社や津田仙の農学校に学んだ。勝安房が留学を世話した静岡藩士木村熊二が牧師となって米国から帰国すると、彼に入門し、洗礼を受け、木村夫人没後に明治女学校の経営を引き継いだ。勝に対して、知る前は悪印象しか持たなかったが、木村夫人の知己だった勝に夫人の小伝の序文を求めるために直接会って以降、勝に心酔し氷川町に通い続けた。『女学雑誌』に掲載した会見記事を勝の没後すぐ編集して出版した『海舟余波』が、増補版の『海舟座談』となって今日も版を重ねている。妻はフェリス女学院の教師だった若松賤子（『小公子』の翻訳で有名）。

徳川慶喜 Tokgawa Keiki 1837-1913

最後の将軍。水戸家出身で尊王の心厚く、大政奉還による新体制を企図したが、開戦で朝敵となり江戸に逃走、家臣が抗戦論で沸騰する中、恭順を説く勝安房の言を容れ、東征軍との折衝を託し謹慎した。勝との関係は終生微妙なものだったが、その忠言に従い晩年まで隠棲した。助命後退隠した水戸から、旧将軍家の移封先の静岡へ移住、1872年に再び位階を授かったが、なお四半世紀静岡を離れなかった。1888年、従一位に昇叙され、その年に生まれた十男が四年後、亡くなった勝小鹿の長女伊代子の婿に迎えられ、勝安房の没後に伯爵家を相続した。勝の深い思いを知った慶喜は泣いた。明治三十年、ついに東京に居を移し、翌年明治天皇に拝謁。賜品に勝の揮毫を請い、勝も泣いた。勝安房の没後三年、旧将軍家の家達に並ぶ公爵位を授かり、大正二年に世を去った。

徳川家茂 Tokgawa Iemochi 1846-1866

悲劇の将軍。少年の身で国政のトップに立ち（1858）、短い生涯を捧げ尽くした。その襲位を阻むために奔走して政界を追われた春嶽も、復権後に会見した主君の誠心に感動し、滅私奉公を誓ったが守り切れなかった。青年将軍の乗艦により知遇を得た勝安房も、その大器と自らへの信頼を覚って奮励すればこそ、主君の急逝に心砕け、悲嘆に沈む大坂城中に満ちる絶望に「幕府の最後」を覚悟した。

## 勝安房 年表

- 1823 江戸で生まれる。
- 1838 父が隠居し家督を継ぐ。（五年後に父小吉死去）
- 1845 民子と結婚。
- 1855 長崎の海軍伝習所に入り（一期生）、ペルスライケンらの教えを受ける。
- 1857 同期生卒業、ペルスライケン帰国後も残留して伝習所運営と修練に励む。
- 1858 カッテンディーケらと共に航海演習で薩摩へ。島津斉彬に会う。
- 1860 訪米使節団員としてサンフランシスコまで往来（咸臨丸艦長）。
- 1862 春嶽政権で軍艦奉行並に抜擢され、小楠や一翁と共に挙国一致論を説く。
- 1863 将軍家茂と春嶽の支持で、神戸海軍操練所を開く。
- 1864 失脚。（翌年、操練所も閉鎖）
- 1866 軍艦奉行に復帰。将軍家茂が大坂城で急死（脚気と判断される）。
- 1867 長子小鹿を門弟と共にアメリカへ留学させる。大政奉還。
- 1868 戊辰戦争。慶喜から徳川家保全の交渉を委されて奔走。（静岡に移封）
- 1869 新政府外務大丞（すぐ辞職）、兵部大丞（翌年辞職）に相次いで任命。
- 1871 静岡学問所教師としてE.W.クラークを招く。（W.E.グリフィスの仲介）
- 1872 静岡から東京へ移住（赤坂氷川町に新居購入）。海軍大輔就任。
- 1873 参議兼海軍卿就任。（二年後、元老院議官に転任）
- 1875 クラークの帰国。ホイットニー家の来日。官職を辞し隠退。
- 1880 三女逸子と目賀田種太郎の結婚。
- 1886 三男梅太郎とクララ・ホイットニーの結婚。
- 1887 伯爵となる。
- 1888 枢密顧問官就任。
- 1892 小鹿が亡くなる。
- 1894 クラークと再会し、「幕府始末」を著す。
- 1899 死去。勝伯爵家を精が相続。

【参考：勝の回顧より】夜、医官松本良順より隠密の報あり。將軍危篤、ついに薨去ありと。我、この報を得て心腸寸断、殆ど人事を弁ぜず。忽ち思う所あり、払暁登城す。城内寂として人無きが如し。我、最も疑う。奥に入れば諸官充滿、一言を発せず、皆目をもって送る。惨憺悲風の景況、殆ど氣息を絶せんとす。我大いに勇を鼓し、後事を談ずれども答ゆる人なし。ついになお奥に進み入り、閣老板倉、稲葉両氏に面晤す。両閣老も痛心、余涙潜々たるのみ・・・心中ひそかに思う。徳川氏今日にして滅亡す、我、仕官にありてこの悲惨を見る。双刀を擲棄し、林下に栖息せんと決心いよいよ堅し。ただ恣に阪地を去らざるは、我、將軍の知遇を蒙ること深し、我、職掌のある所、軍艦をもって靈柩を護し奉り、江戸に入れ奉り、後、一身を所置するにあるのみ。

我、悲惨難危に遭遇す。・・・その末路に到って邦家の機に關す。何ぞその遭遇の奇なる。ただ歎息すべきは我、質下愚にして智慧に乏しく、真勇の肝無く、務め励みて耐忍するのみ。故に執事活潑、円満の跡なく、心胆欠乏、筋骨むなしく枯瘦、ついに万衆一笑の資に過ぎず。ああ誠に憐れむべし。ただ我と等しき者は、老駑鞭影に恐れ、重荷を負駄し、終日汲々奔走し、ついに笞鞭の下に斃れて毫も憐れむ人なきと、何ぞそれ殊ならん。以上「断腸の記」より。

我が邦幕府、即ち將軍政府の沿革大体に關し、米国教師クラーク来りて、余に教示を請うこと、極めて懇切なり。余即ち、記憶する所につき、その大略を筆記し、もってこれに与う。・・・顧うに、我が朝、源頼朝幕府の始めをなし、国家の大権を掌握せし以来、これに継ぐ者、北条氏、足利氏、織田氏、豊臣氏に至り、殆ど六百数十年間、その末路に及び、或いは驕傲奢侈、奸臣を用い、賢者を遠ざけ、多くは私情を先にし、公平を忘れ、ために滅亡せざるはなし。

余は、徳川氏の末路、大事変に遭遇し、測らずもその任に當り、前代を顧み、後世を慮り、ただ邦家の安危、万民の塗炭を救い、海外の交際如何を測り、あえてただ徳川氏の安危存亡を意とせず、勉め励みて国に報ゆる誠心を貫徹せんとす。然れども、我が志の充分貫徹せず、その処置の、屑にして拙なる、顧みて自ら恥ずる所、これその才識の足らざるをいかんせん。

我、徳川氏一敗の後、国を還附し、城地を渡致し、家の存亡に關せず、大権政柄を擲棄する事、一弊履の如きは、絶えて大丈夫の挙にあらずといえども、これより久しからずして、直ちに邦内の大侯伯等、みな競ってその祖先以来幾百年来久しく領握せる所の領地、及び人民をもって官府に奉還し、邦内一統、王政に帰せし者、その故なからんや。我、今つまびらかにその然るゆえんを言わずといえども、後、百年、具眼者出づるあらば、余が、皇国に報い、万民を愛するの誠意と、邦家の経綸に至りて、その基礎を作為せし者とは、実に徳川氏の処置、その率先者たることを明察せん。我、今にして多言喋々、その是非得失を争わざるなり。

以上「幕府始末」より。『勝海舟全集』（勁草書房）所収。